みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Reconstitution of the Rite of Passage of the Ainu before the mid Nineteenth Century, based on “The Illustrated Manuscript of Manners and Customs in Ezo”, by Takeshiro Matsuura



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 大塚, 和義<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004350 |

# 19世紀中葉以前におけるアイヌの通過儀礼
## ——松浦武四郎筆画『蝦夷風俗画誌』稿本を中心に——

大　塚　和　義*

Reconstitution of the Rite of Passage of the Ainu before the mid-Ninteenth Century, based on "The Illustrated Manuscript of Manners and Customs in Ezo", by Takeshiro Matsuura

Kazuyoshi OHTSUKA

This article aims to reconstitute the rite of passage of the Ainu, based mainly on T. Matsuura's unpublished hand written manuscript, which for the sake of this article, I have entitled "The Illustrated Manuscript of Manners and Customs in Ezo", and in part on other documents written before the mid-Nineteenth Century.

Takeshiro's manuscript can be considered the most accurate and detailed material illustrating the entire life cycle of the Ainu. It contains the following the descriptions: a legend on their progenitor, teaching of sexual intercourse, children's play and games (and learning the art of life through them), a boy's wearing a loincloth for the first time, a boy's wearing a formal *sapanpe* for the first time to enter adulthood, tattooing (a girl's being tatooed to prepare for marriage), the hot water trial ( judging a crime by putting one's hands into hot water), marriage ceremony, civilities, exchange of tobacco, *iyomante* (a ritual to send back the spirit of bears), treatment of disease and shamanism, funeral rites, burning the house of the departed, and special funeral rites for a person who died an unnatural death.

Adding *upsor* (women's loincloth expressing their descent) to these descriptions, we can reconstitute the entirety of the rite of passage as elucidated by Takeshiro.

No Japanese has paid enough attention to the concepts on death and rebirth of the Ainu, and Takeshiro, too, did not fully understand them. But what is deserving of special mention is

* 国立民族学博物館第1研究部

that he clearly stated that there was a social order in Ainu society, which was in no way inferior to that of Japanese society.

The Ainu, in those days, were governed by the Japanese, from whom they suffered discrimination and exploitation.

By trying to publish the manuscript, Takeshiro intended to correct such a false view of the Ainu, but, unfortunately, his ambition was not realized.

1. はじめに
2. 『蝦夷風俗画誌』稿本の紹介と検討
3. 武四郎の描いた通過儀礼
4. 他の描写資料
5. 記録からみた通過儀礼
6. おわりに

## 1. はじめに

この論文は，松浦武四郎の自筆稿本で，これまで未公表のままであった，筆者仮称『蝦夷風俗画誌』を中心にすえて，これに19世紀半ば以前の諸文献記録とあわせて，アイヌの通過儀礼の再構成を意図したものである。ここで『蝦夷風俗画誌』をとりあげる理由は，これが未公表の資料であることもさることながら，なににもましてこの画誌がひとの生から死にいたるまでの各過程における人生儀礼を，要領よく簡潔に記述するとともに，その情況をいきいきと描写した図絵を添えている点である。幕末期において，絵と詞書によって通過儀礼に関するデータを，具体的に一書にまとめたものとしては，おそらくこの画誌の右に出るものはないであろう。もっともこの『蝦夷風俗画誌』には，他の文献記録からの引例も少なくないが，さすがに当時きっての蝦夷通をもって任ずる武四郎の手になるものだけに，引例の選択も充分吟味がゆきとどいているうえに，自身の豊かな見聞にもとづく独自の見解が随所に披瀝されている。

ちなみに武四郎は，1818（文政1）年に，伊勢国一志郡須川村小野江で生まれ，1832（天保3）年ひとり江戸にでて，翌年より諸国遍歴を試みる。4年の歳月をついやして，本州各地はもとより，四国，九州の名跡をあらかた訪ね歩いた。この傍ら，数かずの名だたる山岳を踏歩する。その後，おもうところがあって，1845（弘化2）年に蝦夷地（北海道）に初めて渡り，苦心のすえ知床岬に到る。その翌年，北蝦夷地（サハリン）にまで足を踏み入れ，両岸を調査した。いらい，いくたびも蝦夷地におもむいたが，ことに，1856（安政3）年から1858（安政5）年の3年間は，幕府箱館奉行御雇となり，両島をつぶさに巡見する。このとき武四郎は，そのおどろくべき健脚と

精神力にものをいわせて，川を遡って奥地に分け入り，それまでなんぴともなしえなかった内陸部の山川地理取調べをおこなった。この成果は，『東西蝦夷山川地理取調日誌』85巻（『丁巳日誌』24巻，1857（安政４）年と『戊午日誌』61巻，1858（安政５）年から成る）および詳細な北海道全図である『東西蝦夷山川地理取調図』28枚として，1859（安政６）年にまとめられている。

武四郎はまた，蝦夷地におけるアイヌのゆたかな人間性に心をうたれ，これを酷使し悲惨な情況に追いやる場所負請人や無策のまま放置する松前藩に対して，ふかい憤りを感じ，『近世蝦夷人物誌』[松浦　1969(1858)] にその事情を記した。この書は，アイヌの老若男女の生きざまを活写した，すぐれたモノグラフにもなっている。このほか武四郎は，アイヌの言語や風俗習慣にも強い関心を示し，これを克明に記録している。

彼は，膨大な蝦夷地に関するデータを蓄積し終えた1858年の秋に筆をとって，翌年の12月に『蝦夷漫画』[松浦　1859] と題したまことに興味ぶかい一書を出版している。これは，その序文にも書かれているが，蝦夷を知らぬ人に，その風土と風俗・器物などを絵を主にして紹介し，理解をふかめさせる意図で刊行されたものである。とくに絵には苦心を払っており，簡略なようにみえて事物をじつに的確に表現している。武四郎自身，会心のものであったらしく，序のなかで「漢画にあらず和画」でもない真実を描く蝦夷画とでもいうべきものと述べている。この蝦夷画に描きこまれた情報は，短かい詞書で補なわれており，小冊子ながら，すぐれた内容構成である。この『蝦夷漫画』とここで採りあげる『蝦夷風俗画誌』とは，わずかであるが絵柄のまったく同一のものが存在し，その描きかたを見較べると，筆跡・筆勢などから判断して，両者はほぼ同時期に成立したとみてよいであろう。さらに，『蝦夷風俗画誌』の稿本自体の状態は，墨線で区画されたところに，絵と詞書が記されている。絵はかなり丹念に描かれており，そのまま版にできそうなものが少なくないが，詞書は字句を線で消したり，加筆したりして推敲中というところが多い。版型は，『蝦夷漫画』よりひとまわり大きい。この未刊稿本は，アイヌ学に半生をついやした武四郎の絵による集大成をめざしたものの一部である可能性もある。それは稿本の一丁に，朱で＜正月＞，あるいは墨で＜人物＞と添書されて分類がなされていることから推測される。絵は，武四郎自身のオリジナルだけでなく，秦檍麿(村上島之丞)『蝦夷島奇観』[秦　(1982) 1800] や蠣崎波響『夷酋列像』[蠣崎　1973(1790)] などから数多く借用している。他からの借用は，『蝦夷漫画』にもみられることであるが，参考にしたものは，きわめて良質のものであったことは疑いない。たとえば，借用されている『蝦夷島奇観』は，檍麿自筆本をみて写したとおもわれるほど，精密なものである。

## 2. 『蝦夷風俗画誌』稿本の紹介と検討

この稿本は，現存しているものすべてで9丁からなる。稿紙は，すべて同質のものが用いられ，その寸法は縦 24.1 cm，横 33.7 cm を数える。これに，外枠の罫線と折り目に当たる版心の部分が，木版の墨刷りである。外罫の寸法は，縦 19.8 cm，横 27.5 cm，版心の幅は 1.15 cm となっている。頁ごとの横寸法は，13.1 cm，1丁の左右の頁には，絵と解説が描きこまれているが，それが一様ではない。つまり，1丁の左右の頁に，1図ずつのもの2丁，2図ずつのもの6丁，右に1図で左に2図のもの1丁，つごう34図である。それぞれの図には，その上部もしくは下部に辺欄が設けられ，そこに解説が付されている。

全体で34図ある絵の題材と内容は，さまざまである。たとえば，熊送り儀礼のように，そのプロセス順に4場面に分けて描かれたものがあるかとおもうと，1図のなかに2つの題材を描いたものもある。

この9丁からなる稿本は，いずれも両端に2つの綴じ孔が穿たれている。稿紙は，すべて同一寸法であるので，9丁を揃えて重ね合わせてもわずか 1 mm にも満たない。それにもかかわらず，9丁を重ねてみると孔の位置がずれ，ことに孔と孔との間隔が最大で 2 mm ほど相違するものがある。これは，9丁が同一の冊子に綴じられていたものでないことを物語るものか，あるいは同一の冊子とすれば，これだけの綴じ孔のずれを生じさせるためには，かなりの厚冊でなければ起りえないであろう。いずれにせよ，この稿本が綴じ孔からみても，現存する9丁より，はるかに丁数の多いものであったことは疑いない。それは，現存する図柄の互いの関連性からもうかがわれる。この稿本の全体像についての詳しい検討は別稿にゆずり，ここでは，アイヌの通過儀礼およびこれに関連するとみなされる図柄だけを抽出して論じたい。

この『蝦夷風俗画誌』の現存部分だけでも，さいわいなことに，ひとの誕生から結婚，そして死に到るまでの事柄がひととおり図描されている。そこで，各図をその過程順に筆者なりに配列し，つぎのような手順でみてゆきたい。

a) まず図題を「　」で示す。稿本に図題のないものは，「　」なしで筆者が仮題を付した。

b) つぎに，図に付された解説の全文を「　」に示す。原文の行改えは，／で表わす。判読不明な箇所は□で示した。この解説には，筆者の註を付してある。

c) ついで，描かれた図の内容についての検討をくわえる。

1)　始祖伝説の図（図1参照）

「昔し東地サル[1]の／海濱に一つの木剳[2]／姫流れ来り比内ニ／一人の官女在りしが／上陸して岩窟／に住玉ふる何処／よりか一疋の雄犬来りて／是木の実竹の／実を取り来り／養奉りし処／ふ日して官女／臓胚なして／産玉ひしか／比島人の起／元なりしと語る[3]／土人は総て官女／の弄ふ器を悦ふ／品物」

この図の左手には，岸に寄せられた丸木舟が描かれ，これには，宝物箱が積まれている。また，中央の岩穴には娘が坐っており，その傍には，これまた宝物の漆器箱が2個置かれてある。さらに右手には，尾を巻いたアイヌ犬の特徴をとらえたイヌが描かれ，その口に木の実をくわえて娘のもとに向っている様子である。これは，まぎれもなく秦檍麿『蝦夷島奇観』からの写しであり，しかも原図とくらべて，いくらか簡略になっている。しかし，武四郎独自身の知識が，この一見簡略にみえる図のなかに

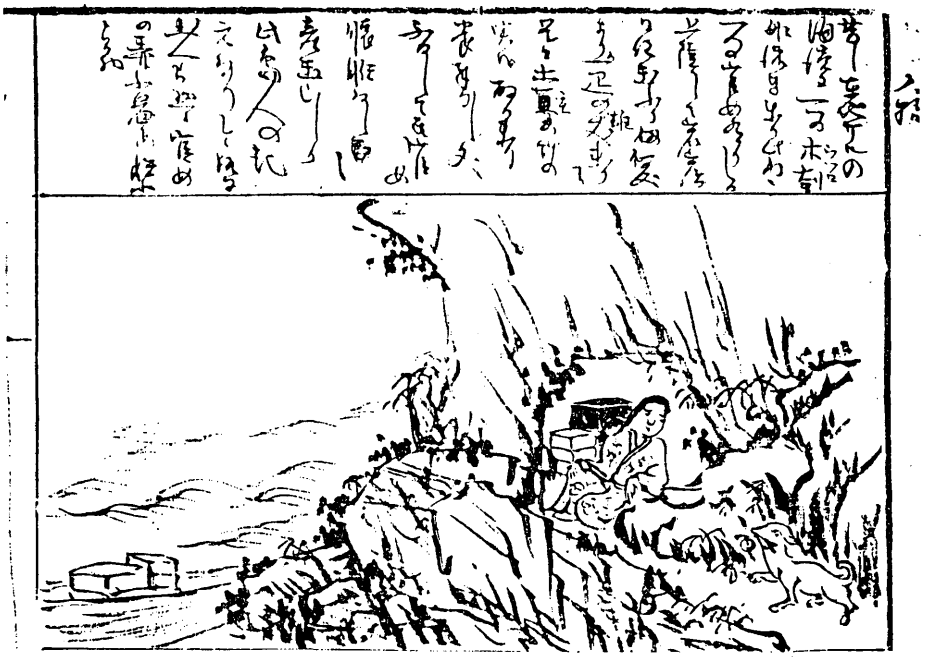

図1　始祖伝説

1) 現在の北海道沙流郡の地を指す。
2) 丸木舟のこと。
3) いわゆる犬祖説話である。説話自体は，すでに武四郎よりも古く，最上徳内なども紹介しているが，図描したのは，秦檍麿『蝦夷島奇観』が最初であろう。武四郎も檍麿のものを写していることが，東京国立博物館本（以下，東博本と略す）と比較して明らかである。

も描きこまれており，さすがに要を得たものである。それは，娘の坐り方が檍麿の正座とは異なり，片膝を立てたものとなっており，これはアイヌの伝統的な習俗のひとつであった。また，娘の着ている衣服も，文様の入った布地であり，アイヌ自製のものではない。これは，娘がアイヌではなく日本から渡来した異人であることを表現しようとしたのか，それとも，異人でありながら，アイヌの風習を身につけた女であることを坐り方で端的に示したとおもわれる。

この図は，人間の意であるaynuと日本語の犬inuをひっかけて，和人がアイヌをさげすむ意図をもったつくり話に基づいて描いたものであるか否かは，にわかに判断することができない。図1からうかがい知れることは，かつて嫁入りのとき漆器などの宝物を財貨的役割りのikorとして，嫁方からも持参する慣習の存在を暗示させるものであろうか。ことに，アイヌ社会の上位の階層のばあいの婚儀が考えられる。

2)　交合を教えるフクロウの図（図2参照）

「女男の人／産れて来り／交合の路も／無りし時，雌／雄の鴞[4]あり／て眼胞（マヘタ）をハタ〳〵／といたす／けるを／見て始めて／彼の路を／来りて／行ひし／たま

図2　交合の教え

4) 鴞はフクロウのこと。

え依りて／比島人／鵠をさして／カモイチカフ[5]と云ケるなり。」

図2の左隅には，崖あるいは大樹が描かれ，やや中央寄りに垂れ下がった木の技がある。そこには，雌雄とみられる2羽のシマフクロウが，仲むつまじく互いに寄りそっている。

右手には，おそらく結婚前の若い男女とみられるふたりの人物が立っている。ふたりは，シマフクロウの交尾を目撃したのであろう。後方の人物は，衣服の右袖を上げて顔を覆うしぐさである。いま目撃した光景に恥じらいをみせる乙女の風情である。すると，背を向けて，手振りを交えながら語る人物は，青年ということになろう。

地面を流れる線描は，岸辺をあらわしたものであろう。シマフクロウは，川岸で魚を捕食し，このような樹木にひそむ生態である。

この図2は，まさしく武四郎のオリジナルである。ゆたかなアイヌ文化への造詣なくしては，とうてい描くことのできぬものであろう。アイヌはシマフクロウを<神である鳥>として尊び，また，kotan-kor-kamuy（村を守護する神）とか，mosir-kor-kamuy（国土を守護する神）として崇拝したが，このことを念頭においた武四郎の構図である。寄りそう2羽のシマフクロウの構図だけは，これとまったく同一のものが，

図3　子どもの遊び（棒高飛び）

5) Kamuy-cikap 神・鳥，神である鳥の意で，ここでは，シマフクロウを指す。

武四郎が版本にした『蝦夷漫画』にみられる。そこには，「東西蝦夷(アイヌ)の土人好て鶚を飼ふて朝夕喰を與へ尊敬する□に仔細を問ふ弐太古蝦夷(アイノ)人に交合の為を教えしハ此鳥なりと□ふ。エナヲを削りて是を建祭るといへり」[松浦　1859:35] と説明が付されている。ここでも，フクロウは，アイヌに交合を教えた鳥であると記されている。

3)「クワイテンク[6]の図」（図3参照）

「夷童六尺／餘の竿の上に／一丈ばかり縄を／張立て居るを／一人の童また／六尺ばかりの竿を／杖として其／にて通行進／んで此上を／飛越るなり／その疾き事／実に狐の／稲荷[7]の鳥／居を越る／よりも／はやし」

ここに描かれた様子は，子ども達の棒高飛びである。このほか，縄飛び，輪突き，片足を何人か組んでけんけんをする片足飛び，ぐるぐる回って急に止まって平衡感覚を競う遊びなどが，18世紀半ば頃に成立したとみられる小玉貞良『蝦夷国風図絵』や1799（寛政11）年に成った谷元旦『蝦夷紀行図譜』や年代も作者とも不詳の『蝦夷古代風俗』に散見できる。

アイヌの子どもの遊びには，身軽さや持続力を習得し，一人前の労働に耐えられる身体づくりと結びつくものが少なくない。ことに弓矢遊びや，輪突き，棒飛びなどは，山野を駆けめぐる狩猟の実習そのものである。

4)「レハ[8]の図」（図4参照）

「レハコル[9]／男子十弐三才／になる物，其親／類の内，年老／て無病息災／の婆，是ゟ犢／鼻褌を結／ハしむるを／例とするなり／内地にても此／例残る処時々／有」

この図は，男の子が褌をはじめて締める儀式を描写したもので，これも武四郎のオリジナルで，この種のものはほかにまったく知られていない。男子12～13才ともなれば，陰毛が生えはじめる頃である。図では，裸になった少年が褌を前でいくぶん折って，後にまわしており，締め方は日本のそれと変わらないようである。ちがう点は，老婆が介添え役をつとめることであろう。少年の耳には，耳輪らしきものが描かれている。1871（明治4）年に明治政府がアイヌに対して，開墾する者に農具を与え，入墨を禁じ，男子の耳輪を禁ずるまでは，少年もごく一般的に耳輪を付けていたようで

6) クワイテンクはクワイテレケであり，kuwa 杖，-e ～でもって，-tereke 飛ぶの意。
7) 狐の嫁入り噺のこと。
8) レハとは，tepa 褌が誤記されたものであろう。
9) レハコル tepa-kor（褌・持つ）で褌着用の意。

**図4**　褌の初締めと礼冠の儀

ある。それは，成人のものより小形であり，装飾も簡素なものが多い。子ども用の耳輪の実物は，かなり遺存されている。

なお，この「レハの図」は，5）「シヤハウベの図」と同じ画面に描かれたものであるが，解説も独立した形で記されているので，それぞれ分離して扱いたい。

5）「シヤハウベ[10]の図」（図4参照）

「シヤハウベ／男十五六才の／時，シヤハウヘ[11]とも／エナヲ[12]を次ニ図／する如く編／まし是を冠／をしめ神に／酒を奉りて祭／ることなり。是／内地の元服／の礼と同じ。後／熊祭など大礼の時／是を被りけるなり。」

この「シヤハウベの図」も，武四郎のオリジナルとみられ，類似のものを筆者は知

10）シヤハウベとは，sapanpe 頭に入るものの意。つまり礼冠のことである。これは成人男子が頭に被るもので，女子は用いることがない。ことに神事に関する儀礼の際には，主導する者は，かならず被らなければならなかった。参加者も被ることが多い。

11）注1）とおなじ礼冠のことであるが，語尾が<ベ>と濁音になるのは，十勝中流域の伏古，幕別などのコタンで，清音は沙流川流域などである。

12）エナヲとは，inaw のことで，ヤナギなどの内皮を削り，撚りあわせて編みあげて冠り物とした。

らない。左手の古老が，右手の若者に礼冠を被らせ，なにごとか語りかけている場面である。古老が礼冠を被っていないのは，神事を執り行なっているのではないという考え方によるものであろうか。古老の膝元には，タバコ入れらしきものが描かれているが，喫煙もこの頃から許されたことを，暗示させようとしたものであろうか。

礼冠は，神へ祈るときに，人間の言葉のたりないところを補ってくれるとされるものでもある。若者でも，これを被っていれば，祈り言葉をささげることがうまくいかなくても，補って助けてくれるものとされた。

6）「ハニキシャラ[13]の図」（図5参照）

「ハツキシャラ／女子年頃ニ成り／て，稼(嫁カ)せんとする時／必す袋古る／もの[14]を肌に／着せ，乳を人ニ見セ／さるやうニ致し／面手等ニ黥文／を入る也，是／諸史に文身在／倭国東北もす／るの物なるへし」

この図も，武四郎のオリジナルと断定してよいものであろう。解説の大半も，武四郎自身の見聞にもとづくとみられるほど他書にない記述であり，これを図とあわせ考察すると，より鮮明である。

図の右手には，老女が片膝を立てて坐り，その傍には，大きな鉄鍋が逆さまになっている。入墨には，樹脂の多く含まれている樺皮を燃やして，鍋底にその煤を付着させ，これを掻きとって施文に用いる。入墨を行なうときは，施文部の皮膚を傷つけるが，これには，ふるくは黒耀石の剝片の鋭利な部分を使ったが，しだいに小刀makirでなされるようになる。驚いたことに，その施文具が老女の左手に握られたところが描かれている。筆者も見落すところであったが，描写されたものだけで判断すると，黒耀石や小刀ではなく，舟釘のようである。難破船の残骸などから舟釘をとって，これでアイヌがさまざまな利器をつくったことは，噴火湾の小幌洞穴出土資料をはじめ，考古学的には数多くの証拠がある。

娘を描いたとおもわれる左手の人物は，顔の描き方に失敗したのか，あるいは施文

13）ハニキシャラとは，harkisam左側に，のことであろうか。入墨をする娘が，施術者の左側に坐わることによる呼称であろうか。入墨は，ふつう sinuye の語が用いられる。

14）「袋古るもの」とはなにを指すのか，確定はできない。現在，二つの解釈が可能で，そのひとつは頭からすっぽりと被って着る，筒状に仕立てられた女子の肌着，mour を指すものではないかということである。これならば，あたかも袋のような形状であり，しかも布地は肌にやわらかいように着古るしたものがよいので，記述が理解できる。

また，下紐のことを指すとみることもできる。これは俗に貞操帯といわれることもあるが，upsor とか run kut と呼ばれ，母から自分の娘へと継承されて，女系を表象するもの。肌に接して腰に巻かれる組紐で，この両端に，三角形や四角形の袋縫いした布切れをつけてあるものが，ほとんどである。これは，幼ない時から女子が肌身につけ，嫁入りのときは実母から新しいものを授かり，結婚前日に着用した事例を筆者は聞いている。

図5　入墨と探湯

される直前で，これから起る痛みに，しかめ面をしているものであろう。この娘は，老婆がアイヌ文様の入った衣服を着ているのに，まったく無地の服を着用している点が注目される。娘の衣服は，丸首衿なしの前開きで，袖口も少ししぼって縁がつけられている。これこそ，まさしく mour である。

7）「サイモン[15]」の図（図5参照）

「サイモン／男女密淫隠悪／等の事あらば／有無を神ニ誓／い熱湯に小石／三ッを入，是を／国史に出る應仁[16]（ママ）／帝九年，天皇／勅之命諸神祇／探湯是以武内／宿称勝之云々／とある／の類」

「ハニキシヤラの図」が描かれた図の左半分に，「サイモン」の図がある。おなじく，鉄鍋を用いることから，両者は同一の図のなかに納められたのであろう。

罪を犯した女が，裁きをする長老の命によって，いま煮えたぎる湯のなかに手を入れ，石を拾わんとするところを描いたものである。

15）サイモンとは，saimon 探湯のこと。
16）これは，『日本書紀』巻10，応神天皇9年夏4月条［黒板　1981:273］のことである。

これは，図，解説とも東博本『蝦夷島奇観』と類似しており，借写したものとみてまちがいない。ことに，応神を応仁と誤っていることは，そのまま写したことを如実に物語っている。

8）「マチコル[17]の図」（図6参照）

「マチコル／とは婚礼の／事，媒酌有／て相互ニ宝[18]を／遣し，納結之（ママ）／義終て，其夜／来らんと欲する／比（コロ）は，爐の火も／消し置時，媒／人ひそかに／連行，其家へ／置帰る事也／後，嫁は火を／焼き附，聟／親等をあたら／し，自分魚／類[19]を煮て／一同えすゝむ／るを祝とする／なり」

図は，東博本『蝦夷島奇観』と酷似している。中央に鍋の掛かった炉が描かれ，そ

図6　婚　　礼

17）マチコルのマチとは，maci 妻であり，コルは，ukor 夫婦になるが結びついた語で，macikor 妻をめとるの意味である。

18）宝とは，和人との交易で得た太刀や刀の鍔などで，刀装は銀の薄板を貼った鞘に，金細工を施したみごとなものもある。これらは ikoro とよばれて，結納や弁償のときに用いられる財貨的性格のものであった。

19）嫁が，夫とその親族たちに魚を煮てもてなし，親族のネットワークにあらたに入るための共食としたことを意味しているのであろうが，このような事例は，いまのところ他書に記載がない。

の右手に，媒酌人に連れられた娘が，しずかに片膝を立てて坐る。媒酌人は，いくらか腰をかがめて聟の方に，娘を紹介しているようすである。聟は，その男親らしき人物と対座している。アイヌの伝統的な結婚式は，ごく簡素なものであったらしく，kotan 集落，村の成員を多勢招いて宴を張るというような形式のものは，ほとんどなかったようである。図は東博本とくらべて，娘の手の入墨とか，炉の燭台が欠落していて全体に略されている。ひとつだけ，この図には炉に inaw が描かれている点が異なる。解説は，大半が『蝦夷島奇観』から採ったものであるが，魚の共食をもって，嫁が聟の親族に加入できるらしいとする記事は，武四郎自身の知識によるものであろう。

9）「ヤンカラフテ[20]の図」（なお，図中に「タンハコエコレ」[21] なる書込みあり。図7参照。）

「またウリゝ[22]とも云／久し振／にて逢たる者は／老年たるの方より／若きかたの，両耳／を挾むゆうにし／それより，そろ〳〵／と手先まで撫卸すことなり／済して何事か，小／音にて申合ふ／また相互ニ膝を／すり寄せ肩の／上に面をのせて／その親しミを／立合ふもあり／(卒)早て，烟草を／つけて，相互に／すつむるを／礼と／す」

図の左手に，2人の男が手をとり合う場面が描かれている。右手の人物は，髪と鬚が白く頭がはげており，老人をあらわしている。また，左手の人物は，髪も黒く壮年の容姿である。このしぐさは，解説にもあるように，ひさしぶりで再会したときの挨拶のようすである。

10-a）「イシヨマンテ[23]」（図8参照）

「イシヨマンテ／是，蝦地の大祭[24]／なり，積雪の中／熊の子を取来り／家婦

20）ヤンカラフテは，「こんにちは」「ごめんください」という挨拶言葉である yankarapte のことであろう。あるいは，同じ意味のカラフト（サハリン）方言，nankarahte かも知れない。
21）タンハコエコレのタンハコは，tampako 煙草のことで，エコレは e-kore おまえに（彼に）与えるの意であろう。つまり，tampako-e-kore で煙草をあげるの意。
22）ウリリとは，uruyruye たがいに頭を撫で合うの意である［大塚・河野　1968: 168］。
23）イシヨマンテは，iyomante それを送るの意で，i それをは，熊を指すが神霊となる尊い存在であるので，間接的に表現された，つまり，飼い熊の霊送り儀礼のことである。俗に熊祭りといわれるが，適切な用語ではない。
24）アイヌの儀礼のなかで最大規模のもので，参集者も多勢であり，また日数も3～4日にわたるものである。

図7　挨拶と煙草交換

図8　飼い熊送り儀礼　その1　檻から熊を引きだす直前の場面

／是に乳を與へ／育て牙の生る／に附て籠[25]を／組立是ニ入置／是，冬に至り日／をりし近村／の者打より木／幣を立，餌を／いろ〳〵喰し／今日はヲマン／テと云て／籠のめくりより／躍り集り／(辛)辛て」

飼い熊送り儀礼の場面の図は，4図よりなるが，これはまったく『蝦夷島奇観』の5画面構成とそれぞれの場面描写も同一であるので，これの写しである。しかも，解説も基本はほぼおなじであるが，若干異なる部分もみられる。たとえば，牙が出てきたら檻に入れると武四郎は述べているが，『蝦夷島奇観』では性質の荒いものは入れるとしているたぐいである。

図は，『蝦夷島奇観』とくらべて，いちじるしく省略されており描き込まれた情報量は少ない。しかしながら，檻の丸太組みは武四郎の方がよく実際をとらえている。男たちが檻をとり囲んで踊り，これより熊を広場にひきだす直前の光景である。

この檻のまわりで踊る男たちは，これから熊の殺害とその神霊送りという，アイヌ世界の重要な儀礼に参加できるものたちであり，同一の狩猟集団に属している。成人した男は，かならず狩猟集団のメンバーに加わらなければ，自己の帰属する kotan の人たちに，一人前と認めてもらえないのである。

また飼い熊送りを主催する者にとっては，自己がその生涯のうちで，一度でもそれを執行できれば男のなかの男であり，多く執行できたものでも2桁の数に至るものはおそらく稀であったとおもわれる。なぜならば，熊を送りの日まで飼育する経済的，労力的な負担もさることながら，これより，数日にわたる送り儀礼に招いた参集者への接待に要する経済的負担がおおきいからである。主催者は，自己の貯えを参集者におしみなくふるまうことによって，人望を得て，その威信を高めるものであった。

近年においても，もしも仔熊が手に入ったならば，ぜひとも熊送りをしてから死にたいともらす古老が少なくない。それは，先祖たちの世界に行っても熊送りを一度もできなかったのでは肩身がせまいとか，熊神にもうしわけがないという気持の表現なのである。

### 10-b)　イシヨマンテ（図9参照）

「籠より出して，其上ニ乗り／肩ニ／縄三すしを／附[26]，是を以て此／方彼方

25）飼育用の檻のこと。丸太や割材を校倉風に組んだもので，北海道では高床式構造のものが一般的である。『蝦夷漫画』には，熊送りの場面はまったく載せられていないが，檻と熊に餌を与える給餌具が描かれている。檻の描写は実際に見たものでなければなしえない筆致であるが，詞書で檻のことを，おなじく籠と表現している。

26）熊を三本の縄紐で縛って，三方に引いて暴れるのを防ぐ。

図9　飼い熊送り儀礼　その2　祭場で花矢を射かける場面

に引廻し／其時是畏カモ／イノシノヲセン／ラノウ[27]と云て山／の方を向，矢を／放す，卒(卒)て一同／の皆／仮の矢弓／を作り[28]，是にて／射かける／事之」

広場にひきだされた熊に，花矢を射かける場面の図である。子どもも，花矢を射ているが，これは将来，成人して一人前の男としてなすべき熊狩りの度胸を養なうためだという。

10-c)　イシヨマンテ（図10参照）

「射卒(卒)れは[29]，長／八尺斗りの木を三本／作り置き志に，首／をすへ上より一本／のせ又胴の上にも／一本のせ是にて／志め殺す[30]こと之／その時，太刀を首

27）『蝦夷島奇観』では，カモキシソヲマンテノウであり写し誤りか。
28）儀礼用の花矢と弓のこと。花矢には木を削って装飾された鏃がついており，これで熊を殺害することはできない。
29）これは殺傷力のない，儀礼用の花矢を射ることを終わったという意味である。
30）この当時，飼い熊の殺害方法は，絞め殺すものであり，これに格別の意味づけをしていたらしく，弓矢による射殺法はほとんどとられなかったようである。つまり，花矢を射て熊を興奮させて喜ばせ，暴れまわって疲れて動作がにぶったところを，丸太によって絞殺したとみられる。その後変化して鉄製の鏃の付いた仕留め矢で，熊の心臓を射ぬいてから，丸太で首を絞める手順になる。明治以降および近年の執行と異なるのは，いかなる理由であろうか。鉄鏃が手に入りにくかったので，手近に得られる丸太で絞殺する方法をとったとみるよりも，熊神に対

**図10**　飼い熊送り儀礼　その3　丸太で熊を絞殺する場面

の／上に当るの之／少しも刃物／を用ゐる事なし／その傍に乳を／与へし婦は／来り，大歎き／可なしむ／事なり」

図は，丸太による熊の絞殺場面であるが，註2）に述べたように，儀礼のひとつのクライマックスというのに，壮厳な雰囲気が欠如している。裸の子どもが男にまつわりつく光景は，その感じをいっそう濃くしている。

10-d）　イシヨマンテ（図11参照）

「殺し(卒)早れは／ヌシヤサンカタ[31]とて／棚を作りキナ／をはりエナヲを／立，太刀是外，家／の宝を飾り／酒，団子等を／供え，今日神に／なり玉ふと云／て悦ひ村内／親類のものどもへ／神酒を出し／て肉を炙りし／頭をエナヲの／先に

して，自ら殺害に関与したことを否定する論理にもとづくのではないかと考えたい。弓矢による射殺ならば，射手が特定できるわけであり，丸太による集団の圧殺ならば，殺害したという実感に乏しい間接的関与になるであろう。これは，北方ユーラシアの熊送りに広くみられる，殺害者を他の民族に転嫁する論理とおなじではないか。アイヌも，卓越した霊的存在である熊の儀礼執行に関して，もしも不行き届きなどが生じ，その怒りをかって災いが起こることを逃避するため，集団による圧殺法をとったのであろう。それゆえ，丸太の上でのアイヌの態度が厳粛さに欠けることも，理解しうるものである。

31）ヌシャサンカタとは，nusasan 幣柵，kata 上に，の意である。

図11　飼い熊送り儀礼　その4　熊神の霊送り場面

さし／シヤサン[32]に立て／祭る是／土人等の大祭／にしてふじ身／物ある家は／必ずなす／ことなり」

この図は，屋外の幣柵において，熊神の霊送りを執り行っている場面である。花莫蓙を張って囲い，inaw を捧げ，そこに太刀や行器などの ikor を飾り，酒やダンゴなどを供えている。中央に坐る老人が，酒箸で椀の酒を捧げながら，祈り詞をとなえているようすである。

11）「シエイクル[33]病人の図」（また図中に「ヘシルウタレ[34]巫醫」の書込みあり。図12参照。）

「シエイクル／とは病人なり，難／にをす病は皆／物親類一門より／集り枕元に／太刀宝物木幣／をかさりて／快ならん事を／神明ニ誓ふ／なり／ヘシルウタレ／は巫醫の類なり／病者有る処えあり／仍て是を神／に祈る。是を／何の薬り

32）シヤサンは，nusasan の nu が脱落したものである。
33）シエイクルは，siyeye 病気，kur 人のことである。
34）ヘシルウタレは，hesuri 神主，utar 人びととでもなるのかもしれない。

図12　病人と巫醫

有るか／何の気の山艾[35]／草を取りて／呑薬とさし／本邦のくすり／の是はなしと／呑ふこと同し／□切却て内地／の巫者か□／につくない貰う／取り／却て夫を」

図には，右手に病人が伏して，傍に2人が見守り，左手に「巫醫」と書き添えられた人物が坐る。中央に，inaw が捧げられ，太刀，鍔，行器などの ikor が供えられた祭壇が描かれている。『蝦夷島奇観』には，「病衆」と題して，類似のものがあり，これを手本にしていることは疑いない。しかし，手本としたものには，祭壇に inaw が全く描かれていない。また，手本には，ヨモギを束ねた takusa を持つ，おそらく巫醫とみてよい人物がいる。takusa で病人の全身を叩くようにして，病魔を祓うものである。本図で，これに該当する人物は takusa を持たず，合掌しているように描かれている。合掌して祈ることはアイヌにみられないので，おそらく手を擦り合わせて礼拝する，onkami を表現したものであろう。この onkami と inaw を，武四郎は対応させているわけであろうが，なぜ takusa を排除してしまったのであろうか。

35) noya ヨモギの意。ヨモギは食用はもとより，葉を煎じて咳止め，虫下しにもされた。ヨモギの葉はもむと，強いにおいを発するので，これによる除魔力をアイヌは信じ，ひろく呪術や治療に用いた。

アイヌの人びとは，tasum 病気になるのは病気をもたらす神のなせるわざと考えていた。人間としてあるまじき行為をしたり，神に対して敬虔な態度で接しない者などに，病気をうつすのである。しかし，よい人間でも悪い神霊がいるので，これに感染させられることもある。そこで，病気治療には，施薬や介護もむろん必要だが，そのうえに病気をもたらした神を祓い清めなければならなかった。

12）「ヲチユエ[36]の図」（図13参照）

「葬／ヤイラムハイ[37]／死する物，四支／を親類とも寄り／集り，撫下し／是をキナ[38]に抱／之枕にしく□／テタルへ[39]之衣腹(服)／また其者の持たる／宝の類[40]を包／ミ，共ニ家の傍／を破る，是より／昇(カ)出して[41]／逆木にてエナヲを作

図13　葬　　礼

36）ヲチユエとは葬礼のことを指すと，『蝦夷島奇観』に記されている。
37）ヤイラムハイは，yay-ram-hai のことであろうか。「自分の心が痛む」耐えがたい痛恨の叫びとでも解せないことはない。
38）死者の遺骸は，キナ kina（莫蓙）に包んで，紐を掛けて梱包する。
39）衣服を意味するテタルへと読めば，tetarape オオバイラクサ（カラフト方言）製のものであろう。また，チタルへとすれば，citarpe で kina とおなじく莫蓙を指す。
40）財貨的役割りをもつ ikor のことで，これには，刀の鍔や漆器類などがある。
41）遺骸を墓地に埋葬するため，室内から搬出するときは，通常の出入口でなく，家壁の一部を破って，そこから出棺した。

り[42]／是を共(供カ)る／葬る二日なり／婦は必ず／衣服を被り／て，天日をうけ／さる様ニする／こと甚／あさし」

図中央には，屋内の隅に設けられた寝台に死者が安置されている。死者は手足をのばした伸展位で横たわっているが，アイヌはほとんどこの姿勢で土中に葬られる。寝台の下には，死者用の着換えの衣服がみえる。右手の立っている男は，遺骸の処置をしているのであろう。左手の人物は2人とも女らしく描かれているが，死者があの世に持っていく鍔と刀の鞘らしき宝物を，kina に包んで荷物をつくっているところである。

この図は，まったく『蝦夷島奇観』の写しで，武四郎自身の知見は描き込まれていない。むしろ，遺骸処置をする男2人のうち，1人を除いて略している。解説に葬礼は2日であると述べているが，通夜をした翌日，墓地に埋葬するのがふつうである。この部分の記述が，しいていえば武四郎のもののようである。

13）「チセヲフイ[43]の図」（図14参照）

「家焼／葬卒(卒)りて家／に帰る物，其破りし／処より家財を／皆出し後，其処／より火をつけ／是を焼仕舞／新に家を／作りて入るを／礼とす，是已／は親の徳に／及ハさる能(?)キ／其家ニ艮居(トドマリ)／かたきと，その／證なり／たる物／兄弟，妻／等の死たる／時は，其爐／をこほつ／計也」

図では，左手に燃える火を描き，中央に家から逃げてきたとおもわれる人物，右手に，文様のない衣服を頭からかぶって姿を隠す者2人である。これも『蝦夷島奇観』からの写しで，しかもかなり略されている。原図では，中央の人物は2人でいずれも男であり，右の2人は明らかに女の特徴をとらえて描いてある。また，家の前に，焼かずに持ちだされた，ikor などの貴重品も置かれている。ただし，解説には『蝦夷島奇観』に記されていない内容がくわえられている。つまり，家焼きは，残された者が死んだ親の徳におよばないから，その家に続いて住む身ではないのでおこなうのだ，という部分である。

14）「メツカウチ[44]の図」（図15参照）

「横死せしもの／有れは，其を／葬る，妻／兄弟の帰り来タ／時，其村の夫(ヲトコ)とも／道の傍に居待／受て，太刀を以／て其額を一打／ツヽ打，血を出し／ヘウタ

42）inaw 木幣のつくり方も，死者にたむけるもののため，通常のものでなく，逆木を用いた。
43）チセヲフイは，cisc-uhuy 家燃えるの意である。
44）メツカウチは，mekka 刀の峰，ウチは日本語の打ちであろうと考えられている。

図14　死者のための家焼き

図15　横死者の葬礼

キ[45]と言て／鯨声を上／け，山ニ死せは／山の方，海ニ死／せは海の方を／向，さわき立／帰ること／なり」

図は，左手に横死者の遺族とおぼしき者がふたり描かれている。それは杖をもった老人と若い女が着ている衣服のうえに，さらに別の衣服を頭から被っているところである。横死者は，老人の息子で，女はその妻という設定であろう。右手のふたりは，刀を抜きその光る刃をかざして，横死をまねいた悪霊を祓う光景である。刀に，すぐれた除魔力の存在をアイヌは信じていた。この図も，『蝦夷島奇観』の略で，解説もおなじでとくに注目される事柄はない。

## 3. 武四郎の描いた通過儀礼

これまで，『蝦夷風俗画誌』の内容の検討をしてきたのであるが，その結果，通過儀礼ならびにこれと関連する副次的な儀礼をつけくわえても，総数で15図しか存在しない。また，これを描かれた主題で整理をすると14テーマとなることが明らかとなった。

しかし，これはあくまでも現存する『蝦夷風俗画誌』の部分に限ってのことであり，先述のごとく失なわれている部分も少なくないのである。その失なわれた図柄については，どのようなものが存在したかについては，想像することすら現状では難しいであろう。そのなかにあって，武四郎自身がほぼ同時期に筆をとったとみられる『蝦夷漫画』に収められている「女児，衣服，文造の図」は存在していた可能性がきわめて高いといえる唯一のものであろう。この図（図16）は，『蝦夷島奇観』からとられたものであり，構図も解説も東博本と較べてほとんど変わらない内容の写しである。

それは，解説に「女児七八才の比より／砂地に出て衣服の文繍を手習ふ／女子ハこしに細き緒をまとふ事六重也／尠き者ハ三重なり」［秦　1982(1800)：62］とある。ここで，「尠き者」のくだりが，東博本では「賤しき者」としてあることが重要な相違である。すなわち，upsor とか runkut とよばれる下紐は，母系をあらわすものであるが，その編み方や房の形状，それに腰に巻いたときの形態や巻き数によって，それぞれの系統が異なっていた。しかし，六重にも巻いた長い下紐の方が，短かい三重のものより家筋の格が確実に上位にあるならば，当時のアイヌ社会の階層化が，ここにも反映されているとみることができる。筆者の調査では，巻き数の多寡が母系の家格をあらわしていたかどうかは，明らかにしえない。武四郎がなにをもって記述を変

45）ヘウタキとは，pewtanke 危急を知らせる叫び声のことであろう。

図16　「女児，衣服，文造の図」『蝦夷漫画』

えたか興味をひかれる。

この図16の中央には，アイヌ文様を描く練習のための手本とする，刺繍を施された衣服が脱ぎ置かれてある。そして，右手に二人の女児が地面に寝そべって，指先で砂地に文様を描いている。その一人は，腰に下紐をつけただけの裸で，左隅に立つ女児もおなじ姿である。武四郎は，さらに原画にはない入墨を，『蝦夷漫画』では女児の口や手に色彩で表現している。このようにみてくると，生から死までの過程を克明にたどった『蝦夷風俗画誌』には，交合をあらわすフクロウの図のごとく，図16は反復して引用されてしかるべきものと考えたい。

本稿では焦点をしぼる必要上，『蝦夷風俗画誌』にある34図のすべてをここに紹介できないが，いずれの図も人物が描かれているところに注目したい。しかも武四郎は，このなかで，和人による略奪や無謀なふるまいに抗して決起したアイヌの英雄シャクシャインの肖像を，彼の心のうちにあるイメージを波響の『夷酋列像』から借りて具現させた，鋭い眼差しの威厳にみちた姿で描いている。これからみて，『蝦夷風俗画誌』において武四郎が意図したことは，アイヌを人間として扱わない同胞の和人に憤激し，アイヌの生から死までの過程やさまざまな人物の姿を描くことによって，そこに和人社会の儀礼や習俗と較べて，なんら遜色のない世界があることを訴えたかったものと考えたい。

武四郎が『蝦夷漫画』を編んだ意図は，その序にもあるように，蝦夷地はどのような風土のところであり，そこに生活するアイヌの文化はどのようなものであるかを，同胞の和人に気軽に理解にしてもらうように，略記したものである。それゆえ，表にみるごとく，通過儀礼に関しては，図２にいくらか似た内容のフクロウ交合の教えと，前述の図16の文様手習と下紐着用のことくらいで，強いて関連のものを探せば，熊檻と挨拶があげられるだけである。このように，『蝦夷漫画』の構成と『蝦夷風俗図誌』のそれとは，おおきく異なっている。しかし，両者をあわせた武四郎の通過儀礼に関する描画による情報は，当時入手できる大部分のものであることを知りうる。

およそ，江戸中期以降から幕末ごろまでの期間に，蝦夷地において和人の手によって描かれたアイヌの風俗画は，かなりの数量にのぼる。しかし，それらの多くは，作者が直接アイヌの風俗を実見して描写したものではなく，いくつかのオリジナル原画から模写をくりかえすことによって生みだされたものである。いうまでもなく，手本から模写をする作業をくりかえしつづけていけば，そこに省略や見落し，あるいは模写をする者の知見を盛りこむことも稀なことではない。いかにアイヌ風俗画が数量的に厖大な存在であっても，とくにオリジナルなものに限定すれば，さしてその数は多

くない。ことに軸装や額装あるいは屏風仕立てなどにされたものには，一定の題材と形式が成立しているといえるほど，近似したモチーフと構図のものが多く存在する。これらのなかから，通過儀礼およびこれに関連するものを見い出すことも試みたが，予想どおり，未知の新資料といえるものはみつからなかった。それは，通過儀礼に関するものは画題にしにくいのと，そこまでアイヌ社会の内側に踏みこんで詳細な観察をすることは，よほどの人物でなければ困難であったからであろう。

そうした観点でみると，武四郎の『蝦夷風俗画誌』と『蝦夷漫画』成立に先立つ50年ほど前の，1800（寛政12）年に成った秦檍麿『蝦夷島奇観』に載せられている通過儀礼に関する描画と解説は，ひととおり生から死までのプロセスが体系的にとらえられた最初のものとして，その価値はきわめて高く評価すべきものである。その内容は表に示したとおりであるが，これこそ，武四郎の『蝦夷風俗画誌』の原型といってもよい構成である。

## 4. 他の描写資料

前述の武四郎のふたつの著作および秦檍麿の『蝦夷島奇観』以外で，通過儀礼を一連のプロセスで画描したものは見当らないが，断片的にはいくつか存在する。そのひとつは，千島春里筆の『蝦夷風俗屏風』[越崎　1959: 第35図] に描かれた12枚のアイヌ風俗画であって，そのなかの一場面に，「婚姻の図」がある。それは，婚礼の日に，花婿やその父親たちが屋内の炉端に坐って待つところに，媒介の男に連れられた花嫁がとつぐ場面である。媒介人が立ったまま，なにやら口上をのべており，これに対して花婿の父が坐ったまま両手をさしのべて挨拶している。花嫁は，媒介人に手をとられながらもその陰にかくれるように小さくうずくまっている。この描写は，文化年間（1804～1818年）頃と推定される。

また，谷元旦が1799（寛政11）年の巡見のときに記した『蝦夷紀行図譜』には，図3に似た棒高跳び，「クワイテンクの図」および図11に近い構図の煙草交換をあらわした「煙草輪吹図」がある。

エトロフ島方面に滞在した福居芳磨が，1801（享和元）年に記した『蝦夷之島踏絵図』には，2種類の女の手甲入墨が図示された「蝦夷女手刳刺之図」がある。また，成人の男たちと少年が弓術の熟達をはかる「夷人弓ヲ習フ図」もある。

さらに，作者も成立年代も不明の市立函館図書館所蔵の『蝦夷古代風俗』は，34図のアイヌ風俗が描かれた折張仕立てのものであるが，そこに，探湯「サイマ」の図と，

葬列を克明に描いたものとしては最上級に属す「ライクルヲツェ」の図が存在する。この葬列の図は，莫蓙に包まれた遺骸を棒に吊して，4人で運び，その後から副葬品を持つ3人の女が従う光景のものである。この作者を高倉新一郎は，筆致からみて伊藤利三郎，すなわち千島春里と推定している。もしも，春里のものであるならば，『蝦夷古代風俗』の成立はやはり文化年間ごろであろうか。

このほか，触れておかなければならないものに，秦檍麿の著わしたものとみられる市立函館図書館所蔵の『蝦夷鬚髪図説』[兒玉・伊藤　1941] がある。これは，アイヌの髪形について地域差および成人と子どものちがいを詳しく図解したものである。アイヌの子どもは，3～4才あるいは5才ごろまでに頭髪を一部剃り落として形をととのえるが，これにはきわめて多彩なものがある。それがおよそ15～16才になると，成人の髪形にする。それは男女とも髪を左右に分けて，おかっぱに切り揃える。地域的には，子どもと較べると成人にはほとんど差がない。

これまでに紹介した画描が，通過儀礼および関連のものを含めた大部分であるといってよいであろう。いうまでもなく，このほか一幅物などで，通過儀礼のある場面をとりあげて描いたものがないわけではない。しかしそれは，蝦夷地に入りこんだ和人商人や支配役人などが，帰国してからめずらしいアイヌ風俗を話題にするための材料として描かせたという性格のものが多い。とうぜん，<穢れ>とみなされがちな葬礼や出産，病気といったものは題材にふさわしくない。また，少年・少女期の節目にあたる重要な場面である褌の初締めとか，下紐の着用初めであるとか，入墨の施文開始といったものは，おそらく描かれることはないであろう。もっともよく散見できるのは，婚礼とか熊送りの儀礼である。

しかしながら，今後，近世アイヌ期の通過儀礼を描写した画巻類があらたに見い出されないとはまったくいえないので，期待するところである。

## 5. 記録からみた通過儀礼

これまで，アイヌ風俗を画描したもののなかから，通過儀礼ならびにこれに関連するものを描出してみてきたわけであるが，蝦夷地を訪れた和人たちが，その情景を筆録したなかにも，これに関連するものが少なからず書き残されている。

そのなかで，確実にアイヌと接触し，その風俗をつぶさに観察して記録することが本格化するのは，18世紀に入ってからといってよいであろう。それは，1710(宝永7)年松前において通詞勘右衛門よりの聞き書きを松宮観山が著した『蝦夷談筆記』[松宮

1969 (1710)]，あるいは1712（正徳2）年厚岸やエトロフ島について著した『エトロフ島漂着記』[エトロフ島漂着記　1969 (1712)] などの初出のグループをへて，1739年（元文4）年坂倉源次郎の『北海隨筆』[坂倉　1969 (1739)] 以後に数多く出現する記録類のなかには，アイヌの風俗をかなり的確に表現したものが少なくない。ことに，18世紀の末から19世紀初頭にかけて，つまり，天明頃より文化・文政にかけての筆録による情報はきわめて正確さを増し，民族誌の再構成もある程度可能である。

これらの情報は，いわゆる近世アイヌの民族資料として重要なものであるが，その取扱いについては充分に吟味をして用いなければならないことはいうまでもない。すなわち，それを記録した当人が直接アイヌから聞き取りをおこなったものは少ないからである。通詞から体験談を語ってもらったり，あるいは松前や各地の交易場などに滞在している物知りの和人から聞いたとおもわれるものが多い。これらの間接的な資料は，ある事柄に対する和人の興味本位の見解がひとたび成立すると，これが誤認や偏見であっても，ほとんど修正されることもないまま語り継がれ，流布される傾向にあることが，おおきな欠点である。また，実地に聞き書きをとったものでも，それらの著作をつぶさに検討すると，ひとつのことがらが相反する記述になっているものも散見される。

そこで，ここでは筆録されたもののなかで，的確な記述とおもわれるものだけを抜き出し，それが通過儀礼に関してどこまで踏みこんだものとなっているか，あらましを把握しておきたいと考える。つまり，19世紀半ばまでの和人が，アイヌの生から死までの儀礼などに関して，どのような理解をしたかを見究めたい。

まず，出産についてはつぎのものがある。「子を産候得ば其儘潮にて洗ひ籠え入，つるし置，啼候得ばゆり動かして置候由」[松宮　1969 (1710):391]，「子を産候時は山に行産いたし，其儘犬の皮に包，あと先を縄にて結つとのやうにいたしひつさげ歩行候へ共，然に鳴きも不レ致候」[エトロフ島漂着記　1969 (1712):8]，「産の時は自身のとりまかなひにて外の手をからず，虫気付くと横にふして安産し，直に海ゑ入て子を洗ひ，又汚たる物どもをすゝぎあらふ。曽て血のさわぐ事もなく，その子虫わづらふ事もなしと云り」[坂倉　1969 (1739):410–411]。

これらの記事から，出産は他人の手を借りず，屋外の仮小屋で出産する例もあること，生まれた赤子は毛皮でくるみ，紐で数カ所をしばっておいたことなどがうかがい知れる。出産直後に赤子を潮で洗うことは，その当時海岸沿いのアイヌがおこなったのであろうが，現在そのような体験なり伝承を知る古老はいない。なお，産後の処理についての事柄や，へその緒のとり扱いなどについての当時の記載はまったくみあたらない。

出産中に死んだ産婦や死産児などのとり扱いについては，これまた触れられたものはないようである。

授乳の様子については,「子供に乳を呑せ候時は裾よりむねまで衣の内をさしあげ呑せ申候。若むねをあけ乳を呑せ候時は，袖を覆ひ外より少しも身の見へぬやうにいたし候」「エトロフ島漂着記　1969 (1712):8],「児に乳するも又必(す)すそより入(れ)て懐にいたる」[最上　1969 (1808):525] とある。アイヌの「女子の袒衣(はだぎ)は木綿布にて製(し)，衽を縫合せて，袋のごとくし，裾より頭をさし入て着す。これをモールといふ」[最上　1969 (1808):525] と記されているように，女性は前あきのない筒型の肌着を着用している。肌を人前にさらすことを恥じるアイヌ女性は，授乳の時には肌着の裾から赤子を入れて乳をすわせたのである。この光景は，しばしばアイヌ風俗画に描かれているモチーフである。

しかし，乳房をみせて授乳させているめずらしい場面を描いたものがひとつ存在している。それは，坐って着物の胸元を開いて乳房をとり出し，裸の赤子に乳をすわせようとしている姿のものである。その赤子の耳には耳輪がつけられ，そこに布切れがついている。この図には解説が添えられている。それは,「乳ヲ見スハロ蝦夷ノ和人ニナラフモノナリ奥蝦夷ニ到リテハ乳ヲ出ス事ヲ嫌フ」[成石　1978 (1857):43] という記述である。この時期になると，ロ蝦夷，すなわち和人地の松前に近い蝦夷地においては，和人の影響をうけて，人前で乳をみせて授乳するアイヌ女性もあらわれたのであろうか。

命名については,「夷俗姓氏なし。生子何日また何歳にて名づくると定りたることなし。祖父母なと猶在りて鍾愛の餘り，一，二歳名づくるもあれど，大抵五，六歳にて名づく。或は七十，八十まで終に名なきものあり。誰が子，誰が弟なと呼ておくことなり。但し，父の名をつがず男女の名をきゝて分別することあたはず。但，男は某アキノ某クルといふ。(中略) 某マツといふは女子の称なり」[最上　1969 (1808):530] とある。

この他の文献をみても，命名は5・6才が一般的であったようで，その名前のつけ方は，子どもの性質や身体的特徴によるもの，あるいは病気や災難をもたらす悪しき霊のつくことを避けるためのものもある。たとえば，幼時に右手を患って太くなって成長したため，その特徴をとってテケバセ（手重きものの意）とつけたり，あるいは丈夫に育つように病魔も驚いて寄りつかないトゥルシノ（垢まみれの意）などと命名した。

幼ない子供たちはほとんど裸で育て，肌を鍛えて丈夫に育てたようである。それに

ついては次のような記述がある。「三、四歳なる女子も裸體なり。既に衣を着ては，五，六歳の女子も前を覆ふことを教，男子は臀，腿をあらはすことを憚らず。唯陽物を見さず。（中略）嬰児四，五歳，厳冬赤膚にして襁褓におく。此時衣をきすれは長じて事に堪へすといふ。六，七歳にいたれば成人と同じ。夏日却て狗裘を服することあり」[最上　1969 (1808):526],「五，六歳に成候得ば帯をもせず，火を焼き腹をあぶり居候」[松宮　1969 (1710):391],「子供等は十二，三歳も裸躰にて育ち，極寒にも犬の皮一枚を着し」[松田　1969 (1822):94]。

こどもの髪形は，前述のごとく『蝦夷鬚髪図説』に詳しい。それは，「夷人子を産てより四五ケ月をも経て，やゝ髪のたけものびたるをまち，幼少の者の髪の法に作るなり。其法すべて三種あり」[兒玉・伊藤　1941:16] として，頭頂部を残すもの，両耳の上の毛を残すもの，前髪ばかりを残すものがあげられている。そして15・6才になると成人の髪形に整えることが記されている。なお，地域的な髪形の差異についても詳述されている。成人の髪形は肩上で切り揃えられるが，これについてはすでに，「女は髪をきりまはして禿となし」[坂倉　1969 (1739):409] とある。

こどもたちは遊びながらおとな社会での心がまえや技を習得する。それは，「十歳に成候得ば最早海へ飛入，蛇杯取候て自分に口過仕候。成長の後細引を張，飛越申候事を常に習，身軽く，六，七尺斗りも飛上候事は自由に仕候由なり」[松宮　1969 (1710):391]，また，「父夷の所業を見習ふのみ。教るといふ事なし。十歳以上のもの雙方に立わかれ，竹竿を以て，居るかたへより，葛を輪に成したるを，空中へ抛やると，竹を以て貫きとめるを勝とす。是は平生のたはむれ也。上國の打毬などにひとし」[東寗　1969 (1806):38]，さらに，「生まれたるまゝにて勤るわざは，打魚，射猟，採草，折薪，嬉戯の間に慣て，務学ぶまての事にもあらず」[最上　1969 (1808):530]，「海岸に出ては遊び，角力とりなどして居，又は五，六寸の丸輪を拵へ地にころがし，天に投，ほそき竿を持て此輪を突，もし突損ずるものは色々の加役有り。遊びとは云ながら則稽古にして，自然と手練を得て，後には海面へ出，膃肭臍，トド，アザラシの類を猟する也」[松田　1969 (1822):94] とある。

このように，男の子たちは輪投げや槍投げあるいは棒高飛びや弓矢をしながら実際の狩りの技術や山野を歩く頑健な身体を養うわけである。女子は母の機織や袋編みなどの仕事を見ながら，これを覚える。これらの場面は，多くの風俗画の中にとり入れられて描かれている。

耳輪や首飾りを用いることについては，「男女とも耳かねを入る。殊に女夷はしとけと云ものを首にかへ(け)る。銭鐵輪の類を繋ぐ。中には珠を以て餝れるも希には有レ之」

[東寧　1969 (1806):38] とある。耳輪は，男女共，4・5才頃までにはつけたが，はじめはただ耳たぶに穴を開けて細い赤布を通しておいただけのものであった。この，両耳に赤布をつけた姿のこどもは数多くのアイヌ風俗画に登場する。金属製の耳輪にもこども用の小型のものがあり，これは，何才からつけるというきまりは特になかったようで，画描から判断するに，10才近くになってからつけるとおもわれる。

褌については，「凡，男夷十五六の頃，所の會所へ出て布帛を求，褌となして結へり」[秦　1982 (1800):12]，また，「男子は下帯しむるを成人とす。男子のしたおびは木綿布を用いて和俗と同じ」[最上　1969 (1808):530] とある。儀礼としての褌の初締めについては，前述の武四郎の記述以外には見あたらないようである。褌を着用することによって成人として扱われ，本格的に狩りに参加し，嫁をとることも認められるわけである。

ところで，女子については，アイヌ社会で特徴的な機能を有した下紐が注目される。これについては，「したひもといふものをイシマといふ。木皮をもてはゝ(巾)，三，四分に組たる紐を結ぶのみなれば，此モールを着る容尤(も)みにくし。故に己が夫といへどもかたく見ることを許さず。若誤りて見れば贖(つくなひ)を出さしむ。此下紐，二，三歳の女子ももし許嫁するものは結びて解かず。人の婦と姦通することあり，婦心より隨はんと欲するものはまづイシマを解て姦夫に与ふ。姦夫もまたこれをもとむ。事顯(る)に及(ん)で法打べし。しかるに仲媒ありて，贖を出し，和解することあり。和と打と共にイシマをときたる婦は辨(わきまへ)て姦夫に与ふ。解(か)ざるものは心より隨(ふ)にあらざる意立こと成て，夫婦たること故のごとし。婦を逐おはざる」[最上　1969 (1808):525] とある。すでに述べたように，『蝦夷島奇観』に娘が下紐をつけている様子が描かれているが，当然ともいえるが，婦人の着用例は図示されたものがない。最上徳内も述べているように，この下紐の着用について厳しいきまりが存在した。

入墨については，「唇を染むるに青草汁を用う。(中略) 額面手臂は皆黥して花弁状と為し，種種織巧ありと云う。是れ幼時に其の母の刺す所なり」[新井　1720] とある。ただし，この記事を書いた新井白石は，蝦夷地を実地に踏んでおらず，伝聞や記録に基づいたものであるが，幕閣の中枢にいた彼ならではの確度の高い情報によるものであろう。また，「婚姻の約束極ると唇と手へ入墨する事土風なり。唇は廻りへ手は綱の手のごとく，碁局の如く，いろいろの形に心々になせり。依て文多きをだてとするよしなり」[坂倉　1969 (1739):409] や，「女ハ皆面ニ草花或ハ破格子ナドヲ黥ニスルナリ唇ヲバ薄ク黥シテ青色ニスルナリ」[林　1944 (1785):269] という記述などがある。

これらのことから入墨は，結婚までに口や手の甲，あるいは頬面に施され，その文様もさまざまであったことかがうかがいしれる。しかし，19世紀初頭になると頬の入墨は衰退するようである。それにしても，「頬に草木の形入墨したるやと人のとひしか，唐太はいふに及す蝦夷にても見さるなりと答へし」[三保　1969(1842):210] とあるほどではなく，一部では根強く残っていた可能性もある。武四郎自身『蝦夷漫画』の挿図において，多くの女性の頬に入墨を表現しているのはいかなる根拠にもとづくものであろうか。『蝦夷島奇観』には，頬の入墨は全く見あたらない。

婚礼自体については，先述したごとくであるが，最上徳内は婚姻関係や婚舎についてつぎのように述べている。

「配偶をもとむる，昆弟，伯叔，父母を嫌，従兄弟をさけず。富有の戸殊更にちなみのやゝ遠からんとするを恐れて，いとこどち婚姻を結ぶものあり。和俗と尤相似たり。婦をめとるとては，約定て男子必まず女家に往，多時少間は同しからず。しはらくすみて後新家を造りて移る」[最上　1969(1808):530]。

また，「婚姻は一類の縁を引て取組，ならざるはとりくまず」[坂倉　1969(1739):409] とあるように，通婚の範囲がきめられていた。

つぎのように，妻以外の女を養う事例も散見できる。「惣て女の心貞実して嫉妬の念なく，夫に随ふ道甚以慎めり。蝦夷のならひ，身上よろしき者程女房多くもてり。女房五人有れば五ケ所に住居し，事有おりには打奇りてともどもに夫をたすけて付合ふもむつまじと云り」[坂倉　1969(1739):410]。これは，夫を亡くしたときに，夫の男兄弟のなかで経済力のある長兄が生活の世話をするかわりに，性的関係を結ぶしきたりがあったことによる。しかし，和人経済に組みこまれたアイヌ社会の財貨蓄積が進行し，その富裕層が妾を囲うことも一部ではみられたかも知れない。

もしも不義密通をして，それが発覚したときは罰やつぐないをしなければならなかった。たとえば，「女房に定め不レ申女を犯し候得ば頭の毛を一本も不レ残抜候て折檻仕候。若女の方より恋慕致し犯候得ば女の耳かねを男の方へ取置候。詮儀(議)に逢候時右の耳かねを出し候得ば，男をばゆるし女斗右の通りせつかん仕候」[松宮　1969(1710):389] とあるように，頭髪をすべて抜かれるような罰も存在した。また，すでに触れたように，サイモンという方法で，密通などの罪を犯したか否かを判定することもなされた。このほか，シュトゥとよばれる槌打棒によって，打ち合う解決法もあった。これは，まず罪を犯した者が三回打たれ，つぎに被害者が打たれ，たがいに打ち合って，生命に変わったことがなければ無罪放免となるきまりであった。

熊送り儀礼は，すでに述べたように，もっとも重要なものであり，アイヌ社会で一

人前の男として習得しなければならぬ基本的な知識と技術がすべて含まれているといってよいだろう。すなわち，神への観念や祈り詞，あるいは礼拝の作法や手順，祭具や供え物のつくり方や用い方などがそれで，これらを身につけなければ成人として参加できないものであるからだ。

挨拶行為も，アイヌ社会に特徴的といえるしぐさとその意味づけをもっている。わけても煙草交換儀礼の展開は，熊神と人とが共飲するための二叉に分かれたパイプさえ生みだしている。

病気になるというのは，それをもたらす病霊が人によりつくからである。これを防ぐため，さまざまなことを日常的に心がけ，病霊がつけ入ることを避けなければならない。ことに恐ろしいのは疱瘡である。これは，「疱瘡疹必死に候故，被レ付候者をば捨置逃申候也」[松宮　1969 (1710):390] というしだいになる。

葬礼に関してはつぎのものがある。

「死を恐るゝ事甚しといへども，死するまうけは常にわすれず。蒲にて織たるむしろをからげ，山にても海にても身に隨へて是を持つ。是蝦夷人の死骸をつゝむ棺槨衣裳のかわりといふ」[平秩　1969 (1783):424–425]。このように，アイヌは死に対する心がけとして，妻はあらかじめ家族の用いる死装束を準備しておくことがたしなみとされた。これは近年においても古老は伝承している事柄である。

また，死者に対しては喪に服し，前述したように，家を焼いてそれを死者とともに送る儀礼をおこなうが，それについてつぎの記載がみられる。「蝦夷の喪禮は，三年の間は決して略す事なしといふ。蝦夷土地諸處に家宅を焼拂ひたる跡あり，是みな親に別れて焼くめり。夫に別れ，婦女其宅を焼く也。喪禮の厚き事は日本に勝りたるべしと云り」[最上　1969 (1790):458]，「人死すれば其家をも調度をもみな焼すてゝあらたに作りてすむといふ」[平秩　1969 (1783):425] などである。

なお，山で熊に襲われるとか，海で遭難して死亡するとかいう，事故死はすべて変死とみなされ，自然死のばあいとは異なった葬法がおこなわれた。変死にいたらせた悪霊などから，生き残った者たちにその災いがふりかかるのを防ぐため，特別な方法で儀礼が執行された。その記事は以下の通りである。

「メッカ打と云ふ事も有。山谷海上などにて横死せし者には一類あつまり泣きとむらひてマキリを以て頭を一打づゝ互に打て血を見て是を弔とするなり」[坂倉　1969 (1739):411]，「メッカ打といふことあり。身寄のもの変死すれば子孫甥等裸になりて立居たるうしろより，他人のうち懇意なるものども打よりて刀又は棒などにて背中を血の流るるほどいくつともなく打たゝくなり。たゝかれたる夷人は気絶する迄もこら

へ居るなり。是は変死せしものゝ事をはやく忘れるといふにてする事なり」[武藤 1969 (1798):18]。

以上，19世紀半ば以前に和人の手によって筆録された尨大なアイヌ民族誌のなかで，通過儀礼に関するおもな内容を述べてきた。そこには，出産から葬礼にいたるまでのかなり詳しい記述がなされているが，それを一貫したプロセスとして把握しようとする視点をもった試みはなかったといってよいであろう。どちらかといえば，自分たちの和人社会と較べて，それと異なった，めずらしい習俗や器物に注意がむけられている。そのなかにあって，最上徳内の『渡島筆記』は，アイヌ風俗を体系的かつ詳細に記述している点においては類書のなかで，筆頭にあげてよいものであろう。しかし，『渡島筆記』にみられる通過儀礼に関する記載にしても，死者を葬り，喪に服するというところで筆が止んでいる。つまり，それ以後，死者の霊が赴むく死後の世界 pokna mosir の存在とその様子については述べられていない。また，今日でも盛んにおこなわれている，死者や先祖霊たちを供養する sinnurappa の儀礼についても触れられていない。さらに，その死者の霊がふたたび赤子として甦るという再生の観念の存在にも気づいていないようである。

また，再生してこの世に生まれたばかりの赤子の霊はか弱いため，悪霊や魔物からそれを守るためのさまざまな手段が存在するが，これについてはほとんど記述されていない。

## 6. おわりに

これまで，松浦武四郎の『蝦夷風俗画誌』稿本の紹介と分析を中心に，これに他のアイヌ風俗を描写した資料ならびに文献記録の両面から補足しながら，アイヌの通過儀礼に関して検討をくわえてきた。ここで扱った内容は，関係資料のすべてを網羅したものではないが，19世紀半ば以前に，アイヌに接触した和人がもっていた知識のありようは，これで概観できるであろう。さまざまな記録をつきあわせると，よそ者が光景として目撃できる部分のひとの一生はほとんど捉えられているといってよいが，それを見えない部分で支えてきた死や再生の観念の存在は，和人には知ることができなかったようである。しかも19世紀半ば以前，つまり江戸時代の蝦夷（アイヌ）研究の最高峰とされる最上徳内の『渡島筆記』でさえ，通過儀礼の外側から観察できる部分のすべての項目を記述しているわけではない。

しかるに，松浦武四郎の『蝦夷風俗画誌』は，表にみられるように，図1始祖伝説

**表**　松浦武四郎の画描と『蝦夷島奇観』の比較
（図版番号は本文と対応する）

| 『蝦夷風俗画誌』1859年頃成立か | 『蝦夷漫画』1859（安政6）年 | 『蝦夷島奇観』東博本1807（文化4）成立 |
|---|---|---|
| 「――」始祖伝説（図1） | ―― | 「女神窟居図」 |
| 「――」交合の教え（図2） | フクロウ飼育の図あり，解説類似 | ―― |
| ―― | 「同　右」文様手習，下紐（図16） | 「カナチ　チミップ　アカシノカル女児，衣服，文造図」 |
| 「クワイテンクの図」子どもの遊び（棒高跳び）（図3） | ―― | ―― |
| 「レハの図」褌の初締め（図4） | ―― | ―― |
| 「シヤハウベの図」礼冠の儀（図4） | ―― | 「シャバウベ」（礼冠の図のみ） |
| 「ハニキシヤラの図」入墨(図5) | ―― | 「女夷文手図」（手甲の入墨図のみ） |
| 「サイモン」探湯（図5） | ―― | 「サイモン」 |
| 「マチコルの図」婚礼（図6） | ―― | 「マチコル婦造図」 |
| 「イシヨマンテ」4場面　飼い熊送り儀礼（図8～図11） | 「熊送り」なし，但し熊檻詳図 | 「イヨマンテ」5場面で描かれている |
| 「ヤンカラフテの図」挨拶(図7) | 「ヤンカラブテの挨」 | 「拝禮図」 |
| 「タンハコエコレ」煙草交換（図7） | ―― | ―― |
| 「シエイクル病人の図」「巫醫」病気治療（図12） | ―― | 「病衆」 |
| 「ヲチユエの図」葬礼（図13） | ―― | 「ヲチユエ」 |
| 「チセヲフイの図」死者のための家焼き（図14） | ―― | （ヲチユエ記載のなかに含む） |
| 「メッカウチの図」横死者の葬礼（図15） | ―― | 「メッカウチ」 |

にはじまり，図15の葬送までひととおりの過程が網羅されている。さらに，『蝦夷漫画』の下紐の図を補なえば，全16図面で描画による通過儀礼を完結させることができる。この『蝦夷風俗画誌』の特徴は，どの画の場面にも人間が活写されており，それも性別，年令さえ判別できるように表現されていることである。そこに武四郎の人間性と独特なアイヌ観をみることができよう。彼は当時，アイヌと接する多くの和人が，

これをさげすんで差別し，人間として扱わないことに憤激して『蝦夷人物誌』において告発しているが，自然とともに生きるアイヌの生きかたに共鳴し，そこに尊厳さえ感じた武四郎だからこそ，おのずと到達しえた視点であろう。<人間アイヌ>を意識して生から死までを描いたと考えたい。

しかし，表でも分かるように，武四郎の通過儀礼のなかには，下紐の図以外にも出産の図，授乳の図が欠けている。これらの場面は男にみられないようにするならわしであり，ことに出産場面は男子禁制である。下紐も，夫以外に見せてはならないものであることはいうまでもない。彼が，下紐をつけた子どもが文様を習う光景を『蝦夷島奇観』からそっくり借用したのも，その画のできがまことによく，いやしさが感じられぬものだったからであろう。武四郎は，アイヌ世界のしきたりを破ってまで，のぞき見するような傲慢な観察者ではなかったのである。

武四郎は『総題三航蝦夷日誌』35巻，『竹四郎廻浦日誌』31巻，『東西蝦夷山川地理取調日誌』85巻，『安政野帳』38冊など尨大な蝦夷地のフィールドワークにもとづく著作を書き残しているように，そのゆたかな体験と知識が，群をぬいたものであることはいうまでもない。

その一端を，褌の事例でみてみると，最上徳内でも男子は下帯を締めるということだけしか『渡島筆記』で述べていない。しかし武四郎は，蝦夷地のどこか不明であるが，踏査のおりに，著者が褌を初めて締める場面にゆきあたり，そこで家族とともにその子の成長を祝ったと考えてよいであろう。

また図12の病気治療では，武四郎が石狩川を遡って現在の深川あたりのペッパラで「其中に一人の婆有り，是をヘシルウタレと云て此地の巫医なり，病者有ば惣て神に祈り，又薬等を差図するよし，其祈禱と云は病者の枕元に小席（チタライ）を敷，太刀（タンネフ），短刀（エモシ），鍔（セツハ），矢筒（イカユウ）等を銜り，エナヲを立て山海の神に祈り」[松浦　1929 (1860):90] と述べているように，実際に目撃したことである。武四郎は，この病気治療の図をはじめ，秦檍麿の『蝦夷島奇観』から相当数の図を借用しているが，それは安易なひき写しではない。檍麿の記述と添図の正確さを，武四郎自身熟知しており，この先達の仕事に敬意を抱いていたからこそ，自分のスケッチ帳からの図をおなじ場面では用いなかったのではないだろうか。しかし，図5の礼冠のように，檍麿が礼冠そのものだけしか描かなかったものに限り，それを被った人物を画面に登場させたものであろう。

こうしてみると，武四郎が『蝦夷風俗画誌』を完結させて，版本になって公にされていたならば，アイヌ社会とその風俗の的確なる理解が，よりふかく和人のあいだに浸透し，ことに近代のアイヌ民族観にすくなからず影響を与えたこととおもわれる。

## 付　　記

本稿の執筆にあたり，本館竹村卓二教授には，貴重なご意見をたまわった。また，『蝦夷風俗画誌』の添書きの解読には，群馬高専田畑勉教授，大阪大学村田路人助手にご教示をいただいた。さらに，本文アイヌ語表記については，千葉大学中川裕助教授のご協力を得たことに謝意を表したい。

なお，本稿は，本館の昭和59・60年度の共同研究「アイヌにおける通過儀礼の体系化と周辺民族との比較研究」（代表者・大塚和義）の成果の一部である。

## 文　　献

新井白石
1720 『蝦夷志』（写本，筆者蔵）。
エトロフ島漂着記
1969(1712) 「エトロフ島漂着記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 3–12。
蝦夷古代風俗
1804–1818頃 『蝦夷古代風俗』 函館図書館所蔵。
福居芳磨
1801 「蝦夷之島踏絵図」（写本，筆者蔵）。
秦　檍麿（村上島之丞）
1982(1800) 『秦檍麿自筆蝦夷島奇観』 東京：雄峰社。
林　子平
1944(1785) 「三國通覧図説」山本饒編校『林子平全集』2，生活社，pp. 225–303。
平秩東作
1969(1783) 「東遊記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 415–438。
坂倉源次郎
1969(1739) 「北海隨筆」 高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 401–414。
蠣崎波響
1973(1790) 「夷酋列像」高倉新一郎編『アイヌ絵集成』（図録巻），番町書房，1–14図。
兒玉作左衛門・伊藤昌一
1941 「アイヌの髪容の研究」『北方文化研究報告』5輯，pp. 1–88。
越崎宗一
1959 『アイヌ絵志』 小樽：越崎宗一版。
黒板勝美・國史大系編修會(編)
1981 『國史大系　日本書紀』前編　東京：吉川弘文館。
松田傳十郎
1969(1822) 「北夷談」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 77–176。
松宮觀山
1969(1710) 「蝦夷談筆記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 387–400。
松浦武四郎
1850–1851 『総題三航蝦夷日誌』35巻。
1856 『武四郎廻浦日誌』31巻。

1859 『蝦夷漫画』多気志楼蔵版（復刻版 1972 国書刊行会）。
1929(1860) 「十勝日誌」 正宗敦夫編『日本古典全集』第3期，日本古典全集刊行会，pp. 83–126。
1969(1858) 「近世蝦夷人物誌」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 731–813。
三保喜佐衛門(談)・布施虎之助(註)
1969(1842) 「唐太話」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 201–222。
最上徳内
1969(1808) 「渡島筆記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 521–544。
1969(1790) 「蝦夷國風俗人情之沙汰」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 439–484。
武藤勘蔵
1969(1798) 「蝦夷日記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 13–22。
成石　修
1978(1857) 『東徼私筆』(大野良子校註) 東京：政界往来社。
大塚和義・河野本道
1968 「解説」泉靖一編『アイヌの世界』鹿島出版会，pp. 160–187。
谷　元旦
1973(1799) 「蝦夷紀行図譜」高倉新一郎編『アイヌ絵集成』(図録巻) 番町書房，170–191図。
東寗元稹
1969(1806) 「東海参譚」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻，三一書房，pp. 23–44。